

学生の意識に見る家政学の課題

渡辺 純子

(昭和63年9月30日受理)

The Problem of Domestic Science in Student's Opinions of This University

Sumiko WATANABE

(Received September 30, 1988)

緒 言

授業をすすめるにあたって、学生達の意識を把握するための具体的資料として、アンケート調査を行っているのであるが、同じ内容について調査した3箇年の調査結果をもとに、本学(家政学部)の学生の専攻の違いによる特色、家政学の課題について考察してみることにした。

1. 調査対象……家政学部3学年、「家庭管理学」履修予定者
2. 調査時期……昭和61年, 62年, 63年の4月の最初の授業時
3. 調査内容……(図-1) 参照
4. 回答者数……昭和61年(389名)
昭和62年(381名) } 回収率 100%
昭和63年(412名)
5. 回答者内訳……(表-1) 参照

調査結果

1) 本学進学(家政学専攻)の動機

「家庭科が好きだった」と「家庭科教師を希望していた」の回答は、どの年度も最も多く、半数近くとなっている。「親のすすめ」、「教師のすすめ」による進学動機は、62年度が最低であった。(図-2参照)

「その他」の回答の内訳としてあげられていたものは「(家庭科教師以外の)資格・免許がほしかった」と「専攻内容を学びたかった」が多くあげられていた。また「将来、役に立つと思う」が若干あった。消極的な理由としては、「入学しやすかった」(附属だったので、推薦

家庭経営学研究室

図-1 調査内容

次の質問に対する回答として、最も近いものの番号を○でかこんで下さい。該当するものがない場合は、「その他」の欄に記入して下さい。

質問1. 家政学を専攻した動機は次のどれですか?

- 1) 家庭科が好きだったから
- 2) 親のすすめ
- 3) 教師のすすめ
- 4) 家庭科教師を希望していたから
- 5) なんとなく
- 6) その他

質問2. 本学に進学した現在、どのような心境ですか?

- 1) 期待はずれ
- 2) 満足
- 3) 何とも思わない
- 4) その他

質問3. 職業についての考えを答えて下さい。

- 1) 出来ることなら、就職したくない
- 2) 2, 3年程度就職し、家庭に入りたい
- 3) 出来るだけ長く続けたい
- 4) 結婚後の状況次第できめたい
- 5) その他

質問4. 結婚についての考えを答えて下さい。

- 1) 出来るだけ早く結婚したい
- 2) 世間で言う適齢期に結婚したい(才位)
- 3) 年齢は気にせず、好きな人が現れた時に考えたい
- 4) 結婚は考えていない
- 5) その他

質問5. 保育についての考えを答えて下さい。

- 1) 早くから集団保育の中で育てたい(何才位から?)
- 2) 集団保育より、自分のそばで育てたい
- 3) わからない
- 4) 子供はほしくない

表-1 回答者内訳

	61年	62年	63年
児 学	49名	48名	56名
児 教	26	49	36
栄 養	82	81	85
理 科	35	44	47
管 士	46	41	43
被 服	109	85	102
美 術	42	32	43
合 計	389	381	412

で入学出来たので、本学しか合格しなかったので等を含む」という回答が、若干あった。

専攻別にみても（図-3、4、5参照）、専攻によって、かなりの違いがみられ、「家庭科が好きだった」

の回答は、各年度とも、被服専攻が最も多く、次いで栄養専攻が多い結果となっている。「家庭科教師希望」については、家庭科の教員免許が取得出来ない、児学、児教、管士、美術が0であるのは当然であるが、教員免許

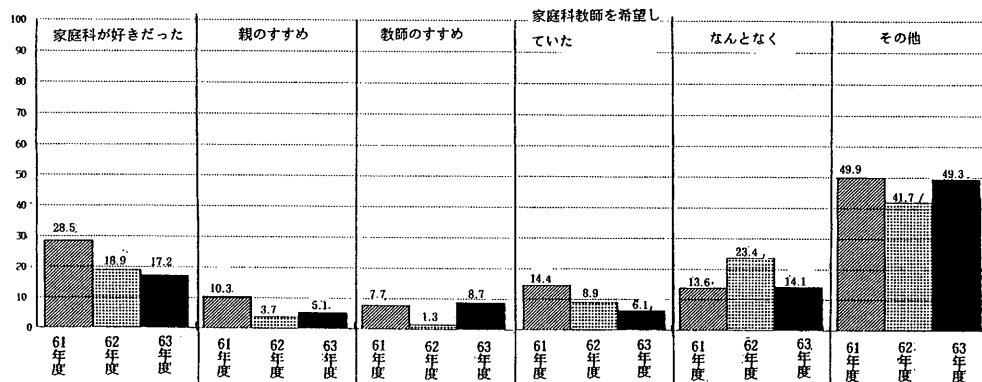


図-2 本学進学（家政学専攻）の動機（全専攻）

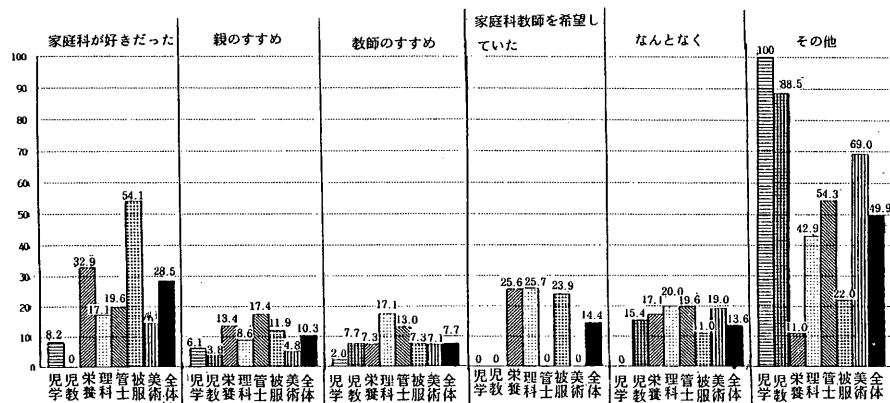


図-3 本学進学（家政学専攻）の動機（専攻別）（昭和61年度）

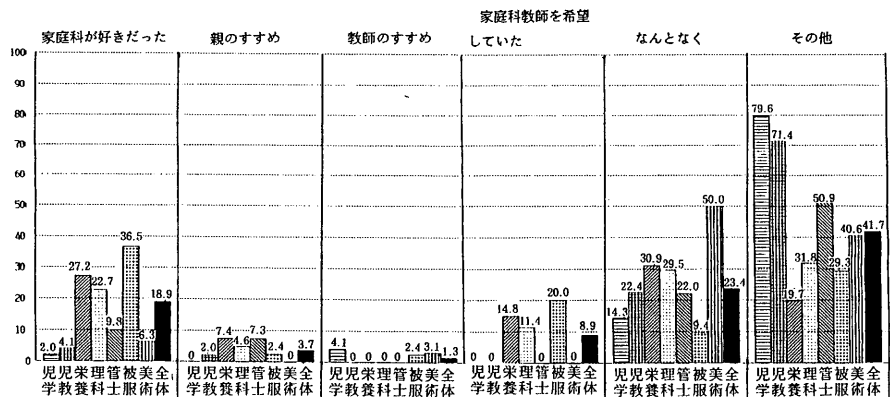


図-4 本学進学（家政学専攻）の動機（専攻別）（昭和62年度）

家政学の課題

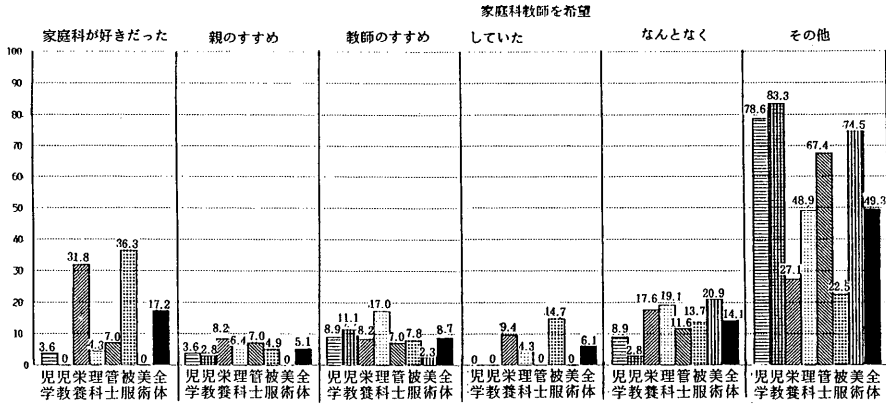


図-5 本学進学（家政学専攻）の動機（専攻別）（昭和63年度）

が取得できる他の専攻についてみると、どの専攻も年々減少している。「教師のすすめ」については、回答の低かった、62年度を除いて、理科コースが最も多い結果となっている。

なお、この項の回答は、複数回答があったため、合計が100%を超えているものがある。

2) 入学後の心境

調査時期が3学年の最初の授業時（4月）であり、2年間の教養課程を修了したばかりで、専門科目の授業をまだ、ほとんど受けていない時期でもあるため、家政学専攻に対しての感想と受け止められない面はあるが、「期待はずれ」は、年々減少し、「満足」、「特に何とも思わない」が増加している。（図-6参照）

「その他」の回答の内訳としては、「満足と期待はずれ

れの両面」が、各年度とも最も多く、次いで、「授業が過密で大変」、「中途半端で物足りない」、「進路（就職）が不安」等があげられていた。

専攻別にもと（図-7、8、9参照）、児学専攻と児教専攻の「期待はずれ」が年々、はっきりと減少している。「満足」の回答では、児学専攻と管土専攻の年々の増加がはっきりとしている。63年度の美術専攻の「期待はずれ」の回答は各専攻中、最も多いにもかかわらず、「満足」の回答が全体（平均）を上回った結果となっている。

3) 職業観

「出来ることなら、就職したくない」という回答は、各年度とも存在はするが、少数である。「出来るだけ長く続けたい」、「結婚後の状況次第できめたい」の回答が

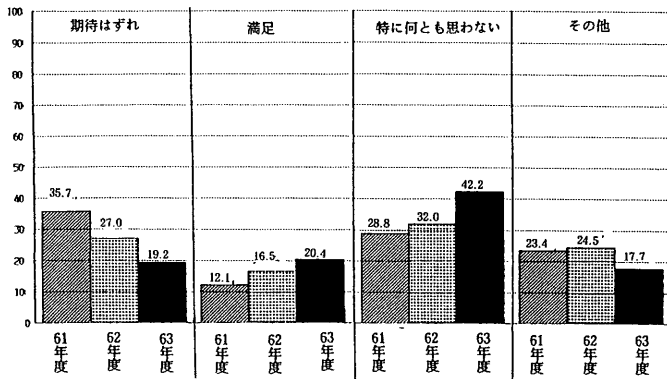


図-6 入学後の心境（3年の最初の授業時の調査）（全専攻）

多く、特に、63年度だけを見ると、「出来るだけ長く続けたい」が最も多い結果となっている。

いわゆる「腰掛け就職」といわれる、「2、3年就職し、家庭に入りたい」といった回答は1割程度となっている(図-10参照)。

「その他」の内訳としては、「一生(定年まで)続けたい」、「結婚または、出産後に退職し、一段落してから、再就職したい」、「仕事、職場によって考えたい」等があ

げられていた。

専攻別にみると(図-11, 12, 13参照), 児教専攻の「就職したくない」と考えている学生が、どの年度も少なく(61, 62年度は0), 63年度においても、わずか2.8%(実数1名)であった。

児童学という、共通した学問を学んでいるながら、児学と児教とには、若干の違いがみられ、「出来るだけ長く続けたい」と考える学生が、児学の方が児教よりも少な

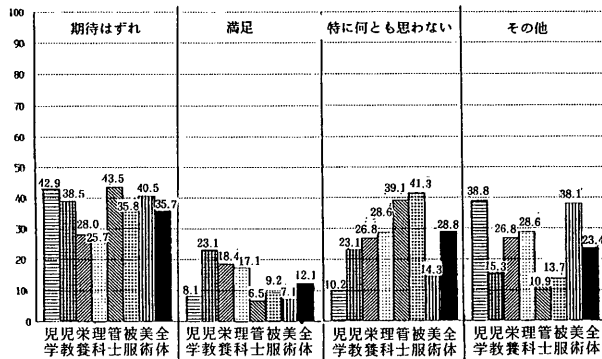


図-7 入学後の心境(3年の最初の授業時の調査)(専攻別)(昭和61年度)

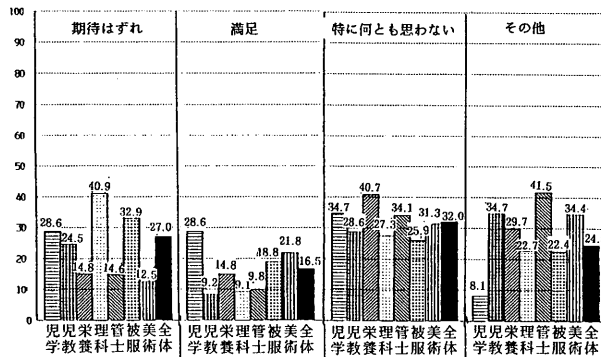


図-8 入学後の心境(3年の最初の授業時の調査)(専攻別)(昭和62年度)

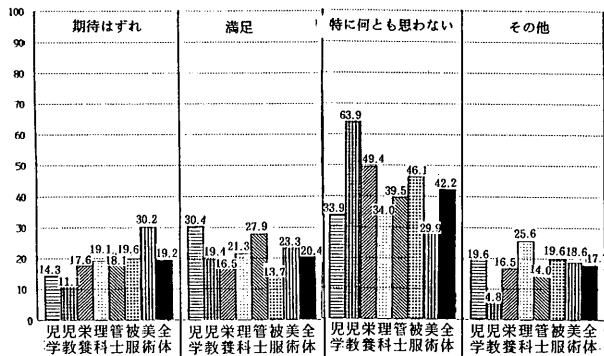


図-9 入学後の心境(3年の最初の授業時の調査)(全専攻)(昭和63年度)

家政学の課題

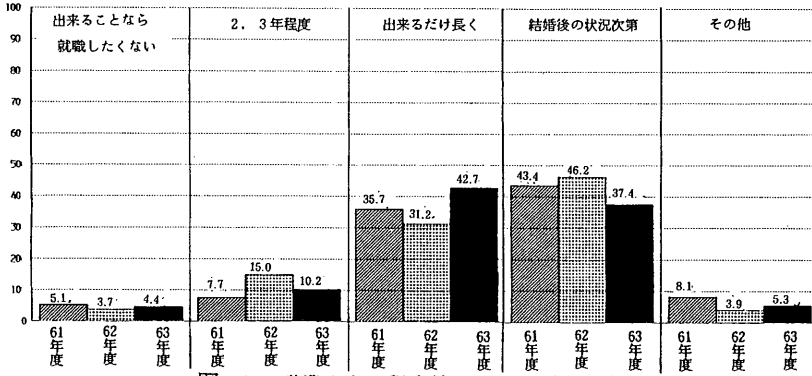


図-10 職業をどの程度続けたいか (全専攻)

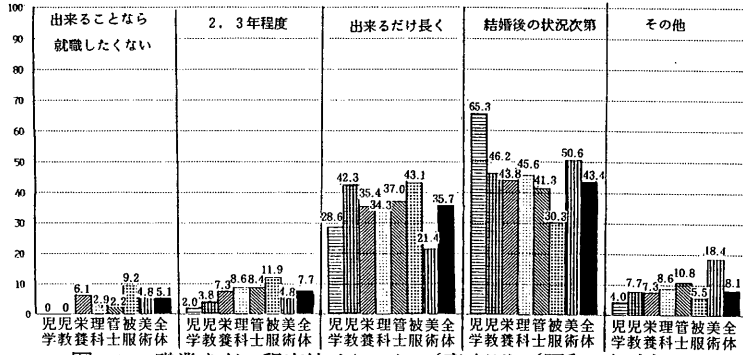


図-11 職業をどの程度続けたいか (専攻別) (昭和61年度)

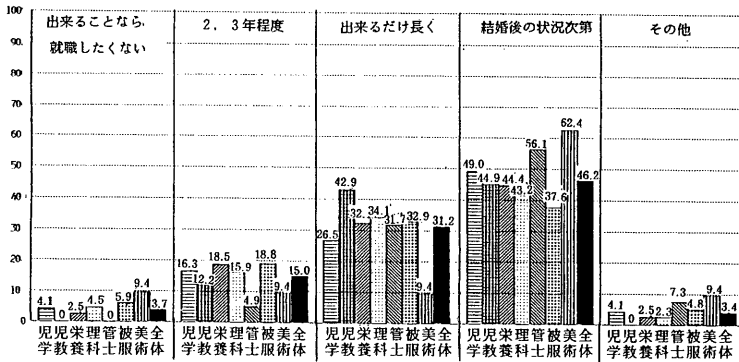


図-12 職業をどの程度続けたいか (専攻別) (昭和62年度)

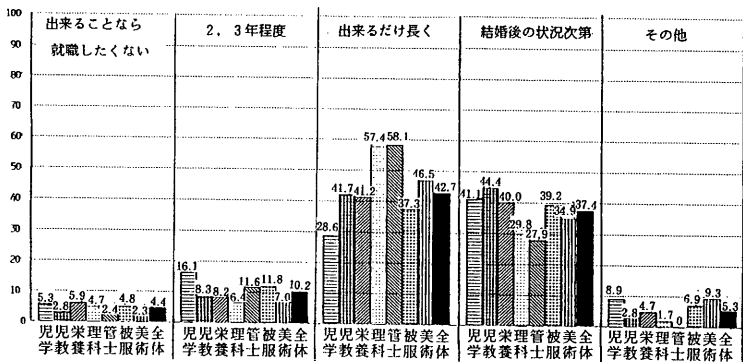


図-13 職業をどの程度続けたいか (専攻別) (昭和63年度)

く、また、児学は全体（平均）よりも少ない結果となっている。美術専攻者の「出来るだけ長く続けたい」という回答は、61、62年共に低かったが、63年には全体（平均）を上回った結果となっている。

4) 結婚観

最も多い回答は、「年齢は気にせず、好きな人が現れた時」で、各年度とも、約半数の回答となっている。次いで多いのは、「世間でいう適齢期に結婚したい」で、いずれの年度も、約4分の1の回答があった（図-14参照）。「世間でいう、適齢期とは何か」については、「25才位までに」の回答が61年度は66名（この項の回答の69.5%）、62年度は90名（この項の回答の72.6%）、63年度は64名（この項の回答の60.4%）となっている。

「その他」の内訳は、「28才までに」、「30才までに」、「30才までは、結婚したくない」、「30代前半までに」等と、具体的に年齢を明示した回答が多く、その他には、「結婚したいと思った時」、「好きな人が現れた時」、「やりたい事をしてから」、「仕事が軌道にのってから」、「精

神的、経済的に自立できてから」、「婚約者が目指している、資格がとれてから」等があげられていた。

専攻別にみると（図-15、16、17参照）、大きな違いは見られないが、被服専攻は各年度とも、「出来るだけ早く、結婚したい」が、全体（平均）を上回っている。

「年齢は気にせず、好きな人が現れた時」について、63年度の専攻間の大きな違いは、あまり認められないが、3年間を通じて見ると、美術専攻の回答割合が高い割合となっている。

5) 保育観

各年度とも、「早くから集団保育で育てたい」が最も多い回答である（図-18参照）。この項の回答者については、「何才からを考えているか」を回答してもらったところ、「3、4才から」が最も多く、61年は219名（この項の回答の78.5%）、62年は177名（この項の回答は85.5%）、63年は209名（この項の回答の83.6%）と、3、4才からの集団保育を考えている傾向の強さがはっきりとしている。数はずっと少ないが、二番目に多かった回

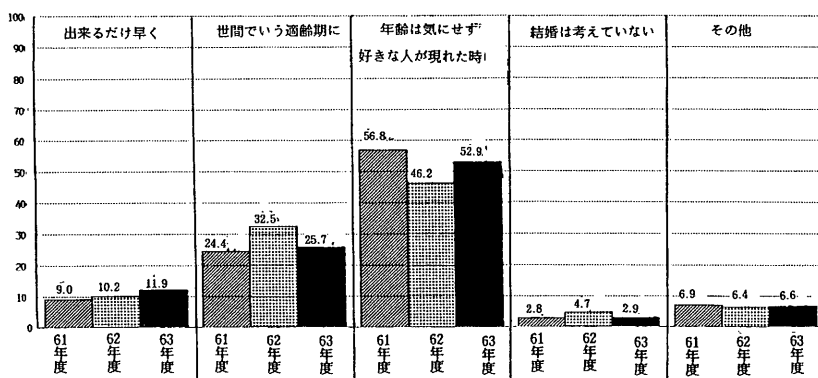


図-14 結婚は、いつ頃と考えているか（全専攻）

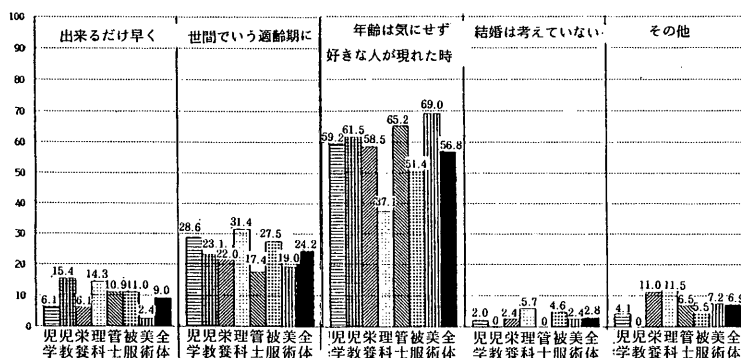


図-15 結婚は、いつ頃と考えているか（専攻別）（昭和61年度）

答は、5才であった。

「集団保育より自分のそばで」と「わからない」の回答が同じようなかたちを示しており、「子供はほしくない」の回答数は、各年度とも、ほぼ同じ割合となっている。

専攻別にみると(図-19, 20, 21参照), 集団保育の担当者(保母, 幼稚園教諭)となるべくコースに学んで

いる, 児学専攻者の「早くから集団保育で」の回答数が, 各年度ともに, 全体(平均)を下回っており, 「集団保育より自分のそばで」が, 各年度とも, 最も高い割合を示していることは, 注目すべきことである。

美術専攻の他専攻との違いとして目につくことは, 「わからない」の回答が各年度とも, トップであることと63年の「子供はほしくない」が16.3%にもなっている

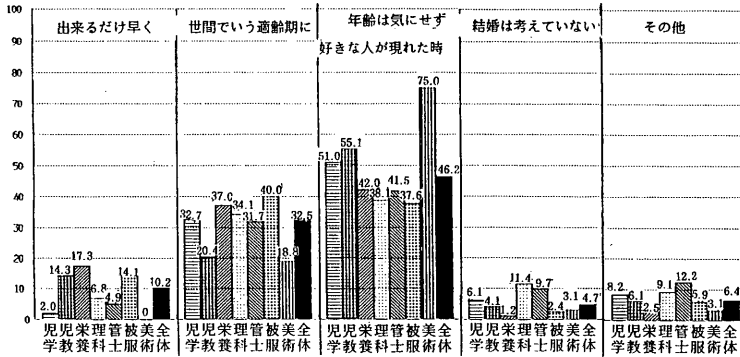


図-16 結婚は、いつ頃と考えているか (専攻別) (昭和62年度)

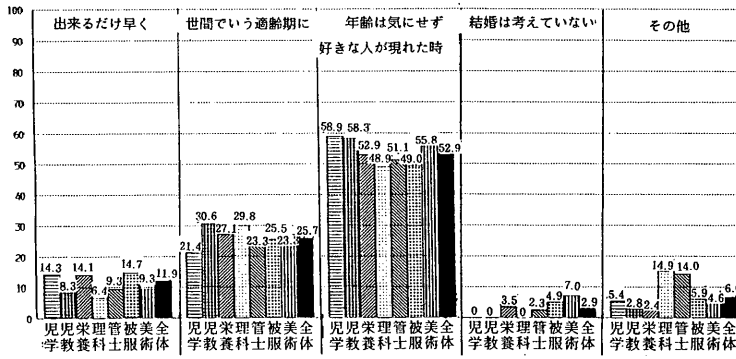


図-17 結婚は、いつ頃と考えているか (専攻別) (昭和63年度)

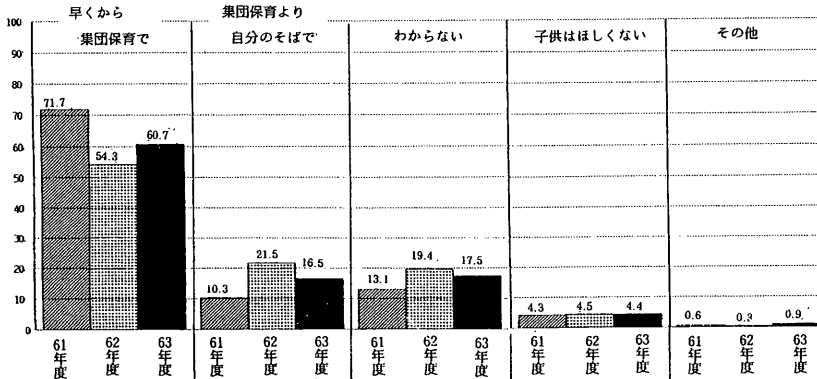


図-18 子供の育て方について (全専攻)

ことである。「子供はほしくない」については、児教専攻が各年度とも、0となっており、児学専攻も61、62年は共に、0となっている。

な学生が少なくないことが予測されるが、資格、免許取得のための進学動機がかなり存在しており、家政学を過去の「花嫁修業」のイメージで考えることは、もはや、時代遅れであるといえようである。

考 察

1) 本学進学（家政学専攻）の動機と入学後の心境

大学進学が大衆化している今日、進学動機があいまい

本学（家政学部）において、取得できる資格、免許は延べにすると、10種に近い数にのぼり、このような面から考えても、十分に職業教育機関であるといえよう。

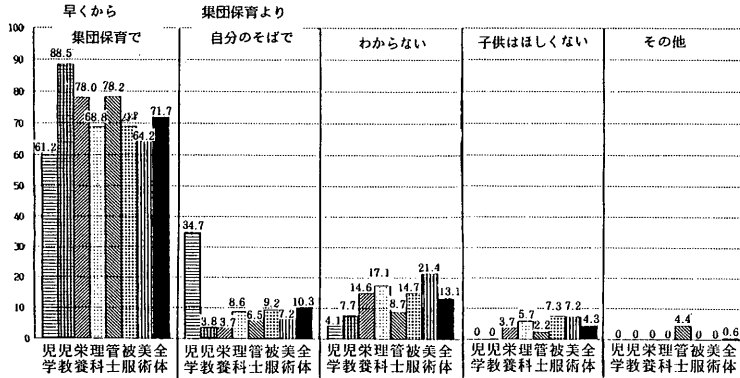


図-19 子供の育て方について（専攻別）（昭和61年度）

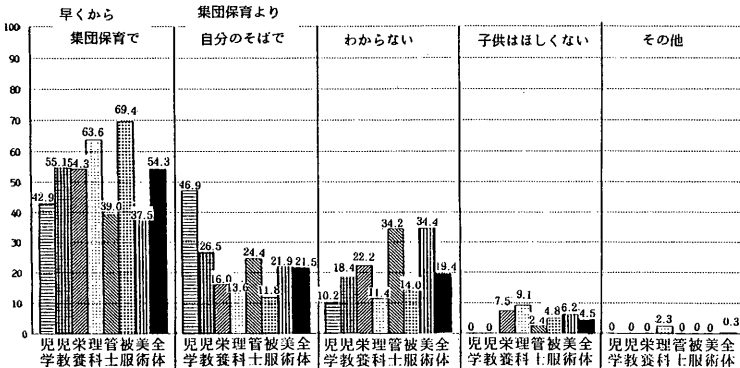


図-20 子供の育て方について（専攻別）（昭和62年度）

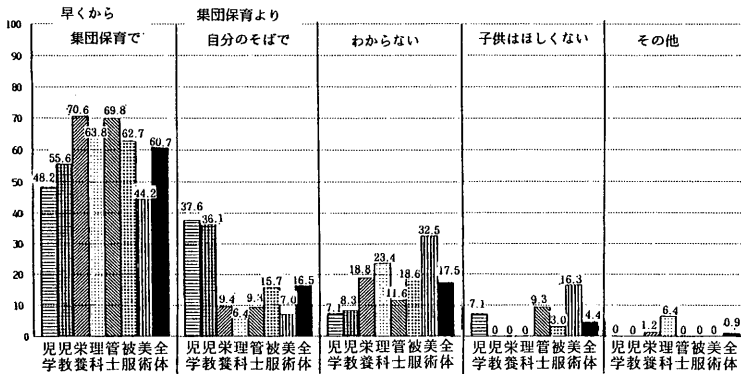


図-21 子供の育て方について（専攻別）（昭和63年度）

過去の本学のかかなり多くの学生が希望していた、「家庭科教師」については、希望者が年々減少傾向にあり、教員の採用が厳しくなっている昨今の事情と考え併せて検討すべき問題を含んでいるように思われる。

「なんとなく」の回答については、この項の回答割合と「その他」の回答割合とが、反比例の関係にあり、「その他」の欄に回答のあった、消極的理由と共通するのではないかと考えられる。

家政学部の学生の卒業時の称号は共通に「家政学士」ではあるが、家政学を専攻したといった意識より、各専攻名、内容に対する選択意識が強いように思われる。専攻によって、学ぶ内容、取得資格が異なるのであるから、当然のことと考えるべきであろうか。

「入学後の心境」として、「満足」、「特に何とも思わない」が増加し、「期待はずれ」が年々減少していることは、一応、喜ばしいことと考えられるが、資格、免許の取得に対する期待を抱きながらも、カリキュラムが過密であることに不満を抱いている傾向が強い（「その他」の回答欄に任意に記入されていた）ことを考えれば、学生達の気持はかなり、複雑なものであると言えそうである。

ごく少数ながら、「3年になり、専門科目が増え、これから、おもしろくなりそう」といった期待もあり、調査時期が異なれば、結果が異なる可能性が考えられる。

また、進路（就職）に対する不安が、教員志願者に見られ、教員採用の厳しさに対する対策の必要性があると考えられる。

2) 職業観

過去の女子の典型的な就業形態であった、いわゆる腰掛け就職志願者は減少し、「出来るだけ長く続けたい」と考えている学生が増加していることは、経済構造の変化、高齢化社会の進行といったことを考えれば、当然なことであるといえよう。

しかしながら、「結婚後の状況次第できめたい」という回答も多い結果となっているのは、結婚後、依然として家事責任が女子に重いといった現状、また、出産後の負担の問題を考えた時、簡単に「長く続けたい」とは言い切れないといった思いが強いためではないだろうかと思われる。「その他」の回答に記入されていた、「結婚後、退職し、いずれ、再就職したい」といった、いわゆるM字型就労希望者が若干存在していることとあわせて、女

子の家事、育児の責任感が大きいということで納得することよりも、女子が自分自身の人生設計をいまだに、決めかねることの問題を考えてみなければならないのではないだろうか。

3) 結婚観

「年齢は気にせず、好きな人が現れた時」の回答が最も多い割合を占めていることは、最近の若者達が晩婚化傾向にあると、統計的に指摘されていることと同様の傾向が本学の学生の意識にも、認められるといえそうである。しかし、それでは、「何才でもよいのか」というと、「その他」の回答にも見られるように、具体的な年齢を考えた上で、その範囲内といった傾向があるように感じられる。

「適齢期」についても、女子の場合、25才が「節目」といった考え方がいまだに存在していることを証明しているかのように、「25才までに結婚したい」といった傾向の強さがあらわれている。

流行語にもなっている「シングル・ライフ」願望については、本学の学生には、あまり、認められないようであり、「世間並み」の結婚願望者が、依然と多いと言えそうである。

しかしながら、少数ではあったが、「やりたい事をしてから」、「精神的、経済的に自立してから」、「仕事が軌道にのってから」等といった回答があったことは、「女子にとって、結婚は永久就職」といった考えが、薄れつつあることを証明していると言えるのではないだろうか。

4) 保育観

保育に関して、いわゆる「3才児神話」というものがあるが、この調査においても、それを証明するような結果が出ている。すなわち、「早くから集団保育を」と考えていても、「2、3才までは、母親の手で……」といった考え方が強いようである。

特に、保育学を専門としている児学専攻者の「集団保育より、自分のそばで」という回答割合が他の専攻を引き離して多いことは、「子供にとって、いかなる保育が望ましいか」を考えるための問題提起がなされているように思われる。

日本人の好きな言葉の一つに、「三つ子の魂、百までも」といったものがあるが、「だから、三才ぐらいまでは、母親のそばで育てることが望ましい」と考える人達

が少なくないようであるが、子供の人格形成に母親のみが最良といった考え方はかならずしも、正しいこととは言えないのではないだろうか。

授乳期の育児の場合には、まさに、母親のそばでの育児が、物理的にも望ましいことは当然のこととしても、その後の子供の人格形成のためには、より多くの人格に触れさせることの方が、むしろ望ましいことではないだろうか。すなわち、家族以外的人格（保母、友人達）に触れさせることの方が、豊かな人格形成が期待出来るのではないだろうかと思われる。そのような点から考えると、児童学を専攻している学生達の「集団保育」を否定するかのよう意識は、非常に気がかりである。

この調査に限らず、児童学（保育学）を専攻している学生達の「我が子は我が手で育てたい」といった意識が他の専攻の学生達より多いことを、日頃、痛感することが多いのであるが、大学教育が単に、個人のための教養に終わることなく、社会的責務を果たせることを目指すとするならば、広い視野に立った「保育のあり方」を考えることが必要なのではないだろうか。

子供達のよりよい成長のための保育を考えることは、保育施設の改善の必要性、親（大人）達の労働条件の改善の必要性に気づくことになるのではないだろうか。つまり、集団保育を否定するのではなく、より良いかたちの集団保育を検討していく、保育学を望みたいと考える。

結 び

学生達の進学動機として、資格、免許の取得を目的とする者が多いこと、職業を出来るだけ長く続けたいと考える者が増えつつあること、結婚を就職と考えている傾向が薄れつつあること等からも、家政学を時代遅れの保守的なものといったとらえ方は当たっていないと言える。

さて、資格、免許をあてこんだ入学が多いのであるが、実際には、その資格、免許を活用しての就職が不可能な場合が多く、その問題についての検討が必要とは思われるが、現実には、いかなる資格、免許の場合も、それらを活用し得る就職が困難であるといった実情を考えた時、それをすぐ活用する事のみを考えることよりは、何らか

のかたちで生かせることを考えさせる教育も必要であると思われる。「将来、役に立つ」といった期待で入学している学生が若干存在することは、家政学が「生活学」として、実用性のあるものと期待しているといえよう。

子育てに関する意識の問題については、「生みの母親」のみが最良であると受け取られるような考え方の問題があるのではなかろうか。親が責任をもって育てるべきことは当然のことであるが、母親が一日中、子供のそばにいないならば育たないとする考えは、その条件にあわない子供はまともに育たないといっていることになるわけであり、そのような考え方が、親を失った子供達を差別したり、養子と実子とを差別してきたという過去の考え方を容認することになるとと思われる。また、子育てが、生む性である女性にとって重要な課題となっていることは当然のことであろうが、女性のみが重大な責任を負うのではなく、男性の存在を考えた保育論、親と子にとっての望ましい保育のあり方を家政学的見地から検討することが必要であろうと考えられる。

職業継続意志に関して、「結婚後の状況次第」といった「あなたまかせ」ともいえる意識は、女性が経済的に自立するための諸条件の整備がなかなか進まないことを懸念すると同時に、高齢化社会における女子労働力の重要性および、女性のライフ・サイクルの変化に応じて、人生設計を考え直さなければならない状況を考えて時、単に、個人的な問題としてではない問題があると思われる。

さて、同じ「家政学士」の称号を得る、家政学専攻者でありながら、具体的な専門が異なっているため、学生達の中には、「家政学」を専攻していることの自覚が薄いか、あるいは全くないといった面が見受けられるのであるが、家政学も他の学問同様、専門分化が進んでいることや、家政学が対象としている問題の多さが原因しているのではないかとと思われる。

家政学は、その対象が「生活のあり方」といえるわけで、細分化することよりも、トータルに考える立場が必要であると思われる。それでこそ、総合科学としての存在価値があるのではないだろうか。